

S・M・C

Shizuoka Medical Communication

看護学校のOSCEに参加して

令和2年1月14日、焼津市にある静岡県中部看護専門学校でのOSCEにSPとして参加しました。学生が実際に患者に接して行う看護能力の試験です。今回は初めて外部からのSPを使っている試験ということで、学生たちの緊張が私にも伝わってきました。

課題は手術後1日目の病室での場面で、入室してすぐの「昨日は手術大変でしたね」「どこか苦しいところはありませんか」などの学生の優しい声掛けに、先ず患者の不安は和らぎました。血圧を測ったり脈を取ったりする度に「今から〇〇しますね」と声を掛けてくれたり、聴診器を当てる前に手のひらで温めてくれたり、また、体に触れる時は「手が冷たくてごめんなさい」という気遣いのある態度に安心して任せられる気持ちが自然にわいてきました。そんな学生が多かったことに感動しました。

「手術後の説明を医師から聞きたい」という患者の要望に対しても、ただ「先生に伝えておきます」だけではなく、患者やその家族の都合も聞き出し、患者の立場にたった対応をした学生がいました。ま



た、手術後の痛みを伴う離床時に「どのように体を動かしたらいいか」と質問したところ、具体的にベッドや背もたれを操作しながら実践してくれた学生がいたことは、とても頼もしく、心強さを覚えました。

このように不安を抱えている患者の立場にたって接することは看護職にとってとても大切なことではないでしょうか。与えられた看護行為を行いながら患者とのコミュニケーションを取ることで、看護に必要な情報は何か、患者の希望、要望は何かなどを知る。この体験が、学生さん達のこれからの実践にきっと役立っていくことと思います。

私にとってもとても良い経験でした。素直で一生懸命の看護学生さんたちに出会い、今後も患者と医療従事者とのより良い関係を築く為の活動に、微力ながら携わっていきたいと思いました。（齋藤）



※SPとは・・・

模擬患者：Simulated Patientの略です。SP（エスピー）は、本物の患者と同様の演技ができるように訓練された人のことで、医療関係者の演習やトレーニングで研修者の相手をします。また、標準模擬患者：Standardized Patientの意味もあり、試験や評価（OSCEなど）に用いられます。

※OSCEとは・・・

客観的臨床能力試験：Objective Structured Clinical Examinationの略です。OSCE（オスキー）は、日本の医学部、歯学部、薬学部6年制課程の学生が臨床実習に進むために合格しなくてはならない試験の一つです。

※Post-CC OSCEとは・・・

臨床実習後OSCE：Post-Clinical Clerkship OSCEの略で、臨床実習後に総合的臨床能力を評価する実技試験です。

静岡市保健所主催 医療従事者向け研修会

【静岡市立静岡病院】

令和元年10月28日、静岡市立静岡病院にて「医療コミュニケーション研修」を開催し、医師・看護師120名の参加がありました。シナリオは、腰痛と発熱で身動きがとれなくなった78歳の女性が救急外来を受診するというものです。私は女性に付き添う姪の設定で、自分には仕事もあり、一人暮らしの叔母を家に帰すわけにはいかず入院させたいと希望する、という救急外来ではよくありそうな場面です。

2回のセッションに、卒後1年目の研修医と3年目の専攻医が臨みました。患者の思いを受け止めながらも、空床がないため帰宅させなくてはいけないという難しい対応でしたが、それぞれ一生懸命に患者に寄り添おうという気持ちが伝わってきました。参加者からは、「実際には患者はそんなに簡単には引き下がらない」という厳しい意見もありましたが、若い医師たちには初々しい感覚をいつまでも持ち続けてほしいと思いました。

ロールプレイでの模擬患者は初めての体験で、戸惑うことも多く、まだまだ十分なパフォーマンスとは言えませんでした。セッションでのファシリテーターやサポートの役割も知ることができ、良い経験

となりました。今後さらに経験を積み、医療者の質や能力の向上のお役に立ちたいと、気持ちを新たにしました。
(佐久間)

窓辺

医師を育てる

小野寺 知哉

先日当院で医療コミュニケーション研修を行いました。若い医師が模擬患者さんに病気の症状を伺い、どのような病気を判断して、今後の処置や入院の必要性などを考えるところまで行います。静岡医療コミュニケーション研究会(SMC)のメンバーに模擬患者者になっていただいて実施できました。若い医師はまだ問診のテクニックが不十分などがあり、貴重な成長の機会となりました。この研修は浜松医科大学の医師が監督して一人の患者さん

学生の研修でも、SMCのご協力のもとで実施されています。医療者は患者さんに最も良い医療をするという目標があり、研さん、勉強をしています。当院は毎年4月に13~15人の卒業したて、医師国家試験を通ったホヤホヤの医師が研修を始めます。医師はある程度職人的で、医師免許を取得しても初めから患者さんに合った診療や治療ができる訳ではありません。当然、上の医師が監督して一人の患者さん

を支え、ベストの治療チームで行います。患者さんは経験度の低い医師が関与する事に心配があるかもしれませんが、若い医師は新鮮な熱意があります。患者さんと医師のコミュニケーションで、医師は患者さんが病気をどうとらえているのか、病気の内容はどう患者さんに伝えていくのかなどをつかんでいきます。この意味で医師は患者さんにも育てられます。私も本当に育てられました。これからも、静岡の温かい人柄や患者さんとの関係の中で良い医師が育つと思っています。

(静岡市立静岡病院病院長

【静岡新聞 令和2年3月26日掲載】

【つばさ静岡】

令和元年11月18日、重症心身障害児・者施設のつばさ静岡で医療コミュニケーションの研修を行い、私はファシリテーターとして参加しました。

最初の打ち合わせで訪問した際に、施設を見学させていただき、どんな患者さんが利用されているかなどのお話を伺いました。職員の皆さんのご苦労も多いと思いますが、患者家族の皆さんのご心配も想像以上ではないかと感じ、私は研修会をうまく進行できるかととても不安になりました。

シナリオは、入所して20年が経過し40才となった息子を支える母親と生活支援員が面談する場面です。患者は3ヶ月前から誤嚥による肺炎を繰り返しており、医師から胃瘻造設などの手術を提案する説明がありました。母親は今まで遠くにいる娘さんには頼らず、一人で考え結論を出してきています。先生からのお話の後、生活支援員が対応する場面が設定されました。

2名の生活支援員が患者の母親(今回のSP)とそれぞれ10分間のロールプレイングを行いました。しっかりと母親の心配事を傾聴し共感しながら、

「息子さんはお母さんに思いをうまく表現できないけれど良くわかっている。面会の時とてもうれしそうな表情をしている。」など日頃の様子を話しながら、「選択肢は一つではない、いつでも話を聞きます。」と、話されました。日頃からこのような対応でお仕事をされているのだろうと推測できる良い雰囲気の中でセッションが終了。お母さんが本当に息子さんのことを愛しているという気持ちを受け取りながらの、支援員の方の温かい言葉のキャッチボールが見事でした。

会場の職員の方ほぼ全員に声を掛けさせて頂きましたが、皆さんがご自分の意見をお持ちでした。日頃から悩んでいる事例であったのか、とても熱心に参加していただきました。また、医師の立場からも細かい助言、胃瘻に関する説明もあり、大変参考になりました。

終了時には会場が何か一つになったような気持ちになり、感動を覚えました。つばさ静岡の皆さんと共に学べたことに感謝いたします。
(山田)

【静岡市薬剤師会】

令和元年10月31日、静岡市薬剤師会において、医療コミュニケーション研修を行いました。『いつもの薬を、初めて訪れた薬局ですぐに受け取りたい患者さん』とのやり取りです。若手 OSCE 経験者と、ベテラン薬剤師さんの2セッション。ポイントは、「いつもの薬だからすぐにもらって、早く帰りたいと思っている患者さん」から、初めて来局された患者さんの情報をどれだけ収集できるかです。

OSCE 経験者は、さすが、スムーズな導入で滑らかな対応でした。しかしながら、「早く帰りたい」という患者さんの要望を重視したためか、伝えたいことは伝えたものの患者さんからの聞き出しが不十分なまま終わってしまったような印象が残りました。対してベテランさんは導入から最後まで、聞くべきことをきちんと引き出し、言うべきことはしっかり伝えるという、充実のセッションでした。持ち時間

10分をフルに使って、早く帰りたいはずの初来局の患者さんに、胸の内まで語らせるというすご技を見せてくれました。

対照的ではありましたが、患者ニーズにこたえたショートセッションも、狙いまで引き出したフルセッションも、どちらも新たな気づきをもたらす学びあるものでした。患者対応に正解はありません。患者さんそれぞれの状況は異なりますし、同じ患者さんでも症状によりニーズは変わります。また、今回のように同じ患者さんでも、薬剤師の対応次第で話す内容が違えることが明確になりました。患者さんにとって満足度の高い対応について考えるきっかけになったものと思います。少しでも日常業務の参考にしてそれぞれに実践していただきたいと思います。

(春日)

模擬患者を経験して

「〇〇さんどうぞ。」とドアが開けられる。「おかけください。」自己紹介に続き、「今日はどうされましたか。」と始まる。人の印象は、会って数秒で決まると言われている。医師と患者も、会った瞬間に非常に多くの情報を得る。外見・表情・声・態度・言葉遣い・質問の仕方・言ったことへのリアクションなど多くのことを感じ取る。患者側からはこの先生は理解してくれているか、信頼できるかも重要な要素である。実際には模擬患者であり、室内には評価者の先生、時には複数台のカメラも設置されている。

OSCE、Post-CC OSCE は試験なので、正確な応答が求められる。応答例は完全に覚え、質問されたことに答えていく。ただ、質問の仕方がそれぞれ異なるので、何をどこまでどのように答えるべきかを、一瞬で判断するのは難しい。黙ってしまう学生もいる。最初の頃、緊張で手の震えが止まらず、何も質問できない学生を前に、待つことしかできずつらかったことを覚えている。学生は、時間を気にしながらまとめに入り、「では…。」と退室を促す。または、質問が終わらないうちに時間切れになる。

浜松医科大学では、医学概論の授業で学生と共にロールプレイをしました。課題に取り組むディスカッションの中で、学生が自ら、医師や患者の心の動きに気付いていく場面に立ち会うことができた時は心

を動かされました。また、4月の新入生オリエンテーション合宿でのロールプレイに、オブザーバーとして参加しました。入学直後にもかかわらず、詳細に調べ、深く考え、熱演する姿に驚き、感動しました。その際に、先生が「君たちは今、患者さんに一番近いところに居る。」とおっしゃいました。その気持ちをベースに、学びを深め、さらに患者に寄り添う医師になってほしいと思います。

個人的な経験から、医療従事者と患者、その家族との関係性はとても重要だと思っています。静岡医療コミュニケーション研究会に入会し、模擬患者について学んでいます。模擬患者の経験を通して、改めてコミュニケーションの大切さを痛感しています。これからもより良き医療の実現のため、努力を続けたいと思っています。

(柳沢)



2019 年度 SMCの活動

開 催 日		活 動 内 容
平成31年 4 月 4 日	木	新規採用者研修会への S P 派遣（静岡県立総合病院）
4 月 13 日	土	浜松医科大学医学部新入生オリエンテーションに参加
令和元年 5 月 12 日	日	2019年度総会
5 月 24 日	金	浜松医科大学「医学概論Ⅱ」（医学科 2 年）への S P 派遣
6 月 2 日	日	SMC 発足20周年記念食事会
6 月 30 日	日	SMC 発足20周年記念講演会
8 月 3 日	土	浜松医科大学医学部 P o s t - C C O S C E（医学科 6 年）への S P 派遣
8 月 9 日	金	MEDC 第73回医学教育セミナーとワークショップに参加（名古屋）
8 月 23 日	金	医療安全認定 臨床コミュニケーター実習研修会2019への ファシリテーター および SP 派遣（東京大学）
9 月 7 日	土	静岡県立大学「CRC特論」への講師および S P 派遣
10月 18 日	木	S M C 第21号&20周年記念特別号 発行
10月 20 日	日	S M C 研修会
10月 28 日	月	保健所主催の研修会への講師および S P 派遣（静岡市立静岡病院）
10月 31 日	木	保健所主催の研修会への講師および S P 派遣（静岡市薬剤師会）
11月 9 日	土	浜松医科大学医学部 O S C E（医学科 4 年）への S P 派遣
11月 18 日	木	保健所主催の研修会への講師および S P 派遣（つばさ静岡）
12月 7 日	土	静岡県立大学薬学部 O S C E（薬学部 4 年）への S P 派遣
令和 2 年 1 月 14 日	火	静岡県中部看護専門学校 O S C E（看護学科 3 年）への S P 派遣
毎月 1 回	土	定例会（静岡市中央福祉センター）

SMC研修会に参加して

SMCのメンバーとなって1年半になります。十数年前に模擬患者（SP）に初めて出会い感動し、昨年入会しました。定例会では「オスキー」「CRC」と略語が飛び交い、頭がついていきません。自分の経験でやれるものでもなく、まだ実践には遠く及びませんが、少しずつ段階的に経験させていただいています。

令和元年10月20日に開催されたSMC研修会に参加しました。「これからのSPに求められる役割」というテーマで岐阜大学の藤崎和彦先生にご講義をいただきました。医学部では30年余も前からSPを使った教育の試みがされていると聞き驚きました。現在は学習のためのSPの活用だけでなく、評価のための活用など、教育現場ではSPへの期待が高まっていると感じました。SPに求められる能力として、学習のねらいに沿ったしっかりした役作りと質の高い演技、そしてフィードバック力がある

ということです。SPの役作りとしては「風船のように」と表現されました。SPは、風船が風に身を任せるように医療者の言葉や態度に反応し、心や気持ち揺れ動くままに対応します。実際にシナリオを読み込んでゆくと、患者像がふわりふわりと風船のように膨らんでゆくのが実感できました。SPに求められる役割はまだ難しく感じられますが、楽しみながら参加してゆきたいと思っています。（玉井）



【連絡先】 静岡医療コミュニケーション研究会 代表 鈴木 崇代

〒420-0961 静岡市葵区北 3-29-27 TEL 054-247-7277

SMC ホームページ URL <http://www.smc-jp.com/>